

コロナ禍における「箱崎・博物館フィールドワーク体験」の成果と可能性

高寄, 浩平
九州大学大学院人間環境学府

三島, 美佐子
九州大学総合研究博物館

<https://doi.org/10.15017/6769085>

出版情報：基幹教育紀要. 9, pp.1-17, 2023-02-24. 九州大学基幹教育院
バージョン：

権利関係：本紀要に掲載したコンテンツの著作権は、断りが無い限り九州大学基幹教育院が有します。コンテンツの利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。ただし、著作権者から著作権等管理事業者に権利委託されているコンテンツの利用手続については、各著作権等管理事業者に確認してください。



コロナ禍における「箱崎・博物館フィールドワーク体験」の成果と可能性

高崎 浩平^{1*}, 三島 美佐子²

¹九州大学大学院人間環境学府, 〒819-0395 福岡市西区元岡 744

²九州大学総合研究博物館, 〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1

Achievements and Potential of the "Hakozaki and Museum Fieldwork Program" under the COVID-19 pandemic.

Kohei TAKASAKI^{1*}, Misako MISHIMA²

¹Graduate school of Human-Environment Studies, Kyushu University, 744, Motooka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan

²The Kyushu University Museum, 6-10-1, Hakozaki, Higashi-ku, Fukuoka 812-8581, Japan

*E-mail: takasaki.kohei.811@s.kyushu-u.ac.jp

Received Oct. 31, 2022; Revised Nov. 18, 2022; Accepted Nov. 21, 2022

In this paper, we discuss the achievements and potential of the educational practice "Hakozaki and Museum Fieldwork Program". Kyushu University finished the relocation of Hakozaki Campus in 2018, and the university museum left at the old campus and the community are trying to collaborate at the fiscal year 2020 to 2021. In addition, students were unable to engage in face-to-face activities or interact with their peers during the COVID-19 pandemic. We discuss the achievement of the fieldwork program in this situation from the results of a questionnaire survey of students. Findings from this practice are as follows. First, it is clear that in the COVID-19 pandemic, "realistic experiences" are being required of students. The students felt that their own learning was deepened by sharing their experiences with other students. Second, students were able to think about the application of their former college town experience to the new campus. Envisioning the future based on past experiences is an important aspect in terms of developing active learners. At last, the student-centered educational practices were able to bring out the active participation of the participants. It is hoped that the Hakozaki Satellite and the University Museum will become a practical educational venue for regional cooperation in the future.

1. はじめに

本稿は、2021年度に実施した「箱崎・博物館フィールドワーク体験」というインフォーマルな教育実践について、その成果と今後の可能性を検討するものである。

九州大学（以下、九大）が創設された1911年から約100年のあいだ「大学町」としての歴史を刻んできた箱崎の町は、現在大きな転換点にある。2018年度に完全移転を終えた九大箱崎キャンパスは、現在大部分が更地化され、跡地の利活用に向けた入札を控えている。近代建築物保存エリアとして大学の歴史的建築物が残るエリアは「九州大学箱崎サテライト」として大学が保持し続けることになり、総合研究博物館（以下、九大博物館）と大学文書館が残り、活動を続けている。特に九

大博物館は、“大学の地域に開かれた窓”として、地域との連携をはかることが強く期待されている。大学・地域双方の視点からも、大学移転後の今後の箱崎地域における九大博物館と地域の連携のあり方を探ることは重要である。

一方で、移転先の伊都キャンパスの周辺地域と大学との連携は未だ発展途上であり、伊都キャンパスへと移転した後の九大の学生は、地域との関係性を十分に構築できていない現状がある。さらに 2020 年からの新型コロナウイルス拡大の影響により、学生はキャンパスに満足に通うことができず、同級生とも交流できないまま自宅からオンライン授業を受ける日々が続いた。このように大学のキャンパスに通うこともままならない状況では、地域との交流など望むべくもない。

本研究では、そのような状況下にある九大の学生に対して、地域と大学の関係性について考える機会を提供するとともに、正規の授業等では実施しにくい対面での体験活動を補完すべく、箱崎の町とその一画である九大博物館にフォーカスしたフィールドワーク体験を実施することにした。参加学生には、事前に本企画の主旨や箱崎地域の現状を説明したうえで、箱崎の町と九大博物館のフィールドワークをそれぞれ約 1 時間 30 分ずつ実施した。学生に対しては、各々が持つ独自の問題関心による自由な参加を許容しつつも、ゆるやかな共通の問題意識として、①「大学町」としてのかつての箱崎地域では、どのような関係性が築かれていたのか、②今後、「大学があった町」としての箱崎地域と九大博物館は、どのような関係性を築いていくことができるのか、あるいは望ましいか、③それらを踏まえて、大学と地域との関係はどのようなものであるべきか、そして、④自分たちが通う伊都キャンパスとその周辺地域では、どのような実践を行っていくことができるのか、という 4 点を事前に提示した。そのうえで、フィールドワークの事前・事後に参加学生の意見を調べる調査票調査を実施した。

本研究は、学生に対する事前・事後の調査への回答から、学生の意識の変化やフィールドワーク体験が学生に与えた影響について考察することを目的としている。かつての大学町である箱崎のフィールドワークと今でも箱崎に残る大学博物館へのフィールドワークは、学生にとってどのような意味を持つのだろうか。そして、その体験を踏まえて、自らが通う伊都キャンパスと地域の関係性に対する学生たちの意識はどのように変化するのだろうか。さらには、アクティブ・ラーナーの育成という視点から、コロナ禍における学生主体のフィールドワーク体験という実践が持つ教育効果や可能性についても論じたい。アクティブ・ラーナーとは、「学び続けることを幹に持ち、未知なる問題や状況にも果敢に挑戦するスピリットと行動力を備えた人材」だとされる¹。そのような人材を育成するための能動的学修（アクティブ・ラーニング）の継続に困難が突き付けられたコロナ禍という環境下において、「箱崎・博物館フィールドワーク体験」はいかなる意味を持っていたのかについて考えてみたい。

2. 九州大学箱崎キャンパスの移転と九州大学総合研究博物館

2.1. 九州大学箱崎キャンパスの移転と九州大学総合研究博物館

本稿で取り上げる「箱崎・博物館フィールドワーク体験」は、九大箱崎キャンパス移転後の箱崎地域と、その後も箱崎に残る九大博物館を舞台としたものである。まずは、箱崎キャンパスの移転

と九大博物館の動向について、その概要を記しておきたい。

1991年に公表された九大の統合移転事業により、箱崎キャンパスは2005年度から段階的に移転が行われ、2018年度には伊都キャンパスへの完全移転が完了した。キャンパス跡地の利用については、2012年の「九州大学箱崎キャンパス跡地利用将来ビジョン検討委員会」や、その後、2013年～2020年にかけて15回にわたって行われた「箱崎キャンパス跡地利用協議会」の中で議論がなされ、2018年7月には「九州大学箱崎キャンパス跡地グランドデザイン」²が策定された。2022年現在、「近代建築物活用ゾーン」として指定された一部のエリアを除いた大学跡地は更地化されインフラ整備が進んでおり、今後の公募入札と再開発を待つ状況である。

宮崎宮の門前町や唐津街道の宿場町、漁村、農村といった多様な顔を持ってきた箱崎地域は、1911年の九州帝国大学の開学以来、大学町としての側面も持つようになった³。今回の大学移転は地域にとっては大学町としての要素の喪失をもたらすものであり、伊藤・シェパード⁴は、『大学町』としての要素を喪失した箱崎は、宮崎宮の門前町に回帰しつつ、福岡市の近郊として住宅街化・市街化がますます進んでいくと思われる」と考察する。また、箱崎キャンパス跡地はその面積の広大さと交通アクセスの良さなどから「福岡市街地に残された21世紀最大の大規模開発用地」⁵と期待が寄せられる土地であり、箱崎地域は大規模開発の可能性にも直面している。対して、大学移転をはじめとする地域の変化は新たな活動が生まれる契機にもなっており、箱崎の地域らしさに着目したまちづくり活動も住民レベルから生まれつつある⁶。このように、九大箱崎キャンパスの移転は箱崎の地域にとって一つの転機といえるような出来事であった。

つぎに、九州大学箱崎キャンパスの移転にともなう九大博物館の動向について述べたい。九大博物館は、2000年に全学共同利用教育研究施設として設置された九大の大学博物館である。箱崎キャンパスの移転にあたっては、九大博物館の移転先が決まらず、2018年の完全移転後も箱崎キャンパスの旧工学部本館において活動を続けていた。2020年の第15回箱崎キャンパス跡地利用協議会にて、旧工学部本館を含めた「近代建築物活用ゾーン」を九大が継続保有することが発表された。このエリアは箱崎サテライトと呼ばれることになり、九大博物館はこの箱崎サテライトを拠点として箱崎地域に存続することとなった。今後は旧工学部本館が九大博物館や大学文書館が入る文化施設として整備され、2027年にリニューアルオープンする予定となっており、九大博物館は大学と地域をつなぐ交流拠点としての役割が強化されることとなる。九大博物館の箱崎地域におけるキャンパス移転後の地域連携の取り組みとして、2021年度より「地域共創協学ミュージアム活動基盤整備事業」が行われている。これは、九大博物館が地域と大学の交流拠点になるべく、ラウンドテーブル事業や音楽イベント、動画配信やラジオプロジェクトなどの実践を地域と協働して実施することによって信頼関係を築いていこうとするものである⁷。

本稿で取り上げるインフォーマルな教育実践は、上記のように大学移転で変わりゆくさなかにある箱崎地域と、今後の地域との交流や連携のあり方を探る九大博物館を、学生がフィールドワークの形で訪れ、実際に現場で様々な話を聞き、体験することによって学びを得ようとするものであった。

2.2. コロナ禍における大学教育

本実践のもうひとつの大きな背景として、2020 年からの新型コロナウイルス感染拡大の影響がある。このコロナ禍では、人々が集まることが強く制限されたため、対面での接触を前提としていた私たちの生活のあり方に大きな影響をもたらした。大学教育においても、キャンパスの教室での対面講義や実習の実施が困難となり、様々なオンラインツールを用いた遠隔授業の実施が試みられた。これらの教育実践の成果や課題については、すでに様々な報告がなされている⁸。九大においても、2020 年 9 月～10 月に、全学の学部学生と大学院生を対象にアンケート調査が行われ、その結果が「新しい生活様式のもとでの大学授業の実態と意識に関する全学調査 1. 学生調査 報告書」としてまとめられている⁹。

これらの報告で主要な論点となっているのは、従来教室で行っていた講義を対面で行うか、オンラインで行うかという問題である。一方で、アクティブ・ラーナーの育成という視点で考えた際には、大学の外に出て行って様々な人に話を聞き、実際に活動を見たり参加したりするような実習、フィールドワークといった体験型の教育実践は重要な位置を占めていたと考えられる。さらに、そのような体験にほかの学生と一緒に参加し、学生どうしで議論を重ねるといった「密な」関わりも、能動的な学習として不可欠なものであった。しかしながら、コロナ禍の状況においては、大学での対面講義の実施以上に地域に出向くフィールドワークの実施は困難をきわめており、そもそも、地域活動自体がコロナ禍の影響を受け、活動の存続の危機に立たされている状況でもあった。

本稿で取り上げる教育実践は、そのような状況下において授業以外のインフォーマルな形で、コロナ禍の大学生に対して「フィールドワーク体験」を実践しようとした試みである。この企画は、箱崎地域を研究フィールドとする博士課程大学院生の高嵯と、九大博物館の教員として箱崎地域の人々との連携構築に取り組む三島らが主体となり、箱崎探索収集研究会の花田典子氏をはじめとする地域の人々の協力を得て実施された。また、実施にあたっては感染対策や安全確保に十分に注意し、参加人数の調整や十分なスペースの確保、食事を挟まないタイムスケジュールでの実施、緊急連絡先の把握を行うなどの対策を行った。

3. フィールドワーク体験と調査の概要

3.1 フィールドワーク体験と参加学生の概要

ここでは、箱崎・博物館フィールドワーク体験の概要と参加学生について記述する。まず、2021 年 9 月 23 日に予行演習として筆者の所属する人間環境学府人間共生システム専攻共生社会学コースの大学院生 6 名を対象として、博物館内の見学を実施した。2 時間ほどの見学終了後、その後のフィールドワーク体験の本実施に向けて、面白かった点や実施の方法についての意見交換を行った。

その後、2021 年 11 月 8 日の 13 時から、箱崎・博物館フィールドワーク体験の本実施を行った。参加者は、文学部社会学・地域福祉社会学研究室に所属する 15 名（うち 3 年生 10 名、2 年生 5 名）、大学院人間環境学府人間共生システム専攻共生社会学コースに所属する 4 名（筆者を含む）の計 19 名である。なお、参加者に対しては、2021 年 11 月 5 日に当日の注意点や簡単な説明などの事前レクチャーをオンライン会議にて 30 分程度実施した。

フィールドワーク体験のスケジュールは、13:00 より三島の案内により旧工学部本館の建物内と九大博物館の収蔵品の見学を1時間30分程度行った。その後、花田典子氏の案内により、箱崎地域のまち歩きを実施した。1932年から2012年まで営業していた大学湯という銭湯跡の建築物や、大学通りと呼ばれる商店街などを歩き、大学や地域の歴史を古くから見てきたパン店、鮮魚店、下駄店ではそれぞれの店主への簡単な聞き取りを実施した。最後に、花田氏が経営する箱崎水族館喫茶室にて意見交換を行い、16:00 ごろに解散とした。

また、参加者に対しては、フィールドワーク体験を実施する前後にそれぞれ調査票調査を実施した。いずれの調査も Google Forms を利用したオンラインでの調査実施である。つづいて、これらの調査の概要について述べる。

3.2 事前調査

事前調査は、11月5日から11月8日のフィールドワーク体験実施前までの期間に回答を募集した。回答は15票であり、学年の内訳は3年生10票、2年生5票であった。参加者と照らし合わせると、大学院生を除いて学部生の参加者15名全員から回答があったこととなる。なお、性別は男性が8票、女性が7票であった。

質問項目は、学年、性別のほか、居住形態、居住場所、今回の企画に参加しようと思った理由、九大博物館のことを知っていたか、箱崎や箱崎キャンパスについて知っていることやイメージ、伊都キャンパスやその周辺地域についてのイメージ、伊都キャンパス周辺の地域との関わりの有無、という項目である。

3.3 事後調査

事後調査は、11月10日から11月14日の期間に回答を募集した。回答は13票であり、学年の内訳は3年生8票、2年生5票であった。なお、性別は男性が8票、女性が5票であった。事前調査と比べて回答数が減っているが、企画終了後にオンライン上で回答を依頼しており、匿名回答のため、個別に回答を催促することは難しい。回答が得られなかった理由についても不明であるが、自由記述の設問が多く調査に負担を感じた可能性も考えられるため、今後の検討事項としたい。

質問項目は、学年、性別のほか、居住形態、居住場所、今回のフィールドワーク体験の感想、九大博物館で印象に残ったところや面白かったこと、町を歩いて印象に残ったところや面白かったこと、参加して良かったこと、大学と地域の関わりについて感じたこと、次回参加したいか、という項目である。

4. 調査結果の分析

それでは、事前調査と事後調査の結果をいくつかの論点からみていきたい。

4.1 コロナ禍におけるフィールドワーク体験

まずは、コロナ禍という特殊な環境にあるなかで、このフィールドワーク体験がどのような意味をもっていたのかについて、調査結果から見ていきたい。

まず、事前調査におけるフィールドワーク体験への参加理由についてみていく。「あなたがこの企画に参加しようと思った理由はありますか？」という設問に対する回答結果が図1である。

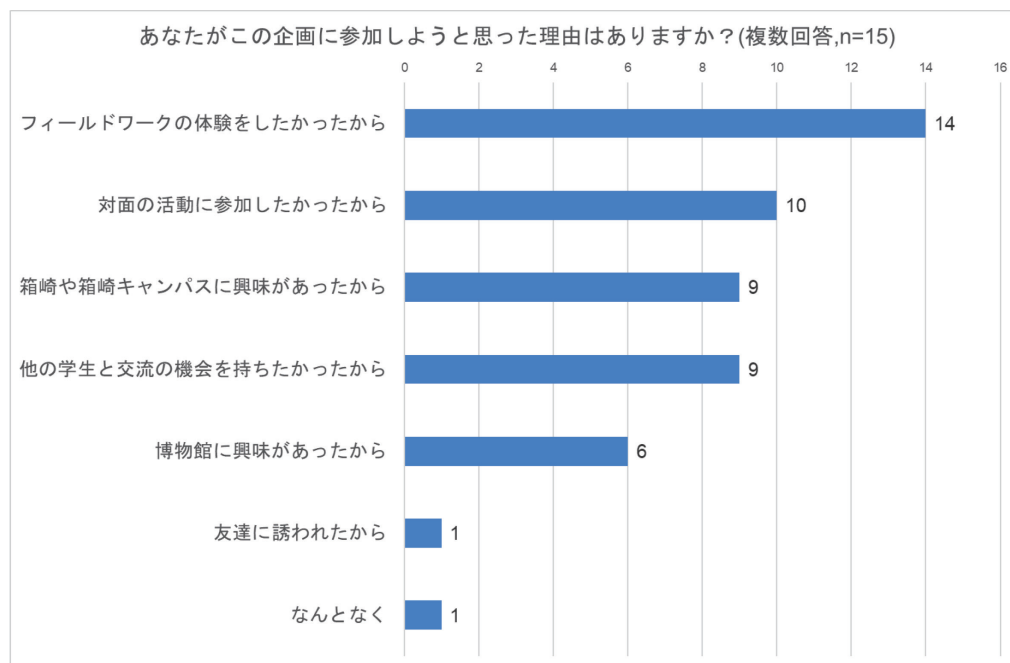


図1 参加理由 (事前調査)

複数回答であるが、最も回答が多かったのは「フィールドワークの体験をしたかったから」で15票中14票の回答があった。つづいて、「対面の活動に参加したかったから」が10票であり、2020年の新型コロナウイルス感染拡大以降、オンライン授業が中心でフィールドワークなどの体験がほとんどできていない状況の中で、フィールドワークの体験や対面の活動に参加できるということが学生にとって大きな参加動機になっていたことが分かる。さらに、「他の学生と交流の機会を持ちたかったから」という回答が9票あったことから、オンライン授業の中では他の学生との交流機会が得られにくく、フィールドワーク体験の活動内容だけではなく、他の学生との交流機会が得られるということも参加動機の一つとなっていたことが分かる。

さらに、事後調査の「今回の箱崎・博物館フィールドワーク体験に行った感想を自由にお書きください」という自由回答の設問では、

- ・フィールドワークがどういうものか、その片鱗に触れることで、フィールドワークを通して地域や地域の人と繋がることの魅力を実感できた。博物館も、バラエティ豊かな展示に触れられたので楽しかった。展示に関する他の参加者の興味や関心からも面白い話が引き出せて良かった。また、他の学生や院生と密に交流することができた点も良かった。
- ・フィールドワークができることが社会学研究室を志望した理由の1つだったので今回参加できて嬉しかったです。

- ・初めてのフィールドワークでしたが、街を歩いて色々な方にお話を聞くというのが、とても楽しかったです。大学内で行う授業よりも、多くの経験や考えが浮かんで、それをその場で人と共有できたのが1番良かったです。
- ・箱崎という街で初めてフィールドワークを行い、地域の雰囲気や歴史を直に感じることができました。その場の雰囲気というものは座学では学べないと思いますし、目で見えるものだけが全てではないとわかりました。そうした意味で、非常に有意義な体験でした。

というような感想が得られた。このように、今回参加した社会学を専攻する学生にとっては、フィールドワークを行うことが分野を専攻した一つの理由にもなっており、オンライン授業の中では体験できなかったフィールドワークに実際に参加できたということが学生にとって大きな意味を持っていたことがわかる。さらに、博物館の展示やまち歩きのなかでの発見をその場で他の学生と共有するということが、その場の体験やアイデアを増幅させるという効果を実感できたということも学生の感想から読み取ることができる。

4.2 総合研究博物館における体験から

つづいて、フィールドワーク体験の内容自体に対する参加学生の反応をみていきたい。先ほど確認したように、事前調査の段階での参加動機は大学博物館や箱崎の地域といった活動の内容に対する関心よりも、対面の活動に参加できることやフィールドワークを体験できること自体が多く回答されていた。対して、事後調査の「今回の企画に参加して、良かったことはありますか？」という設問に対する回答は、図2の通りである。

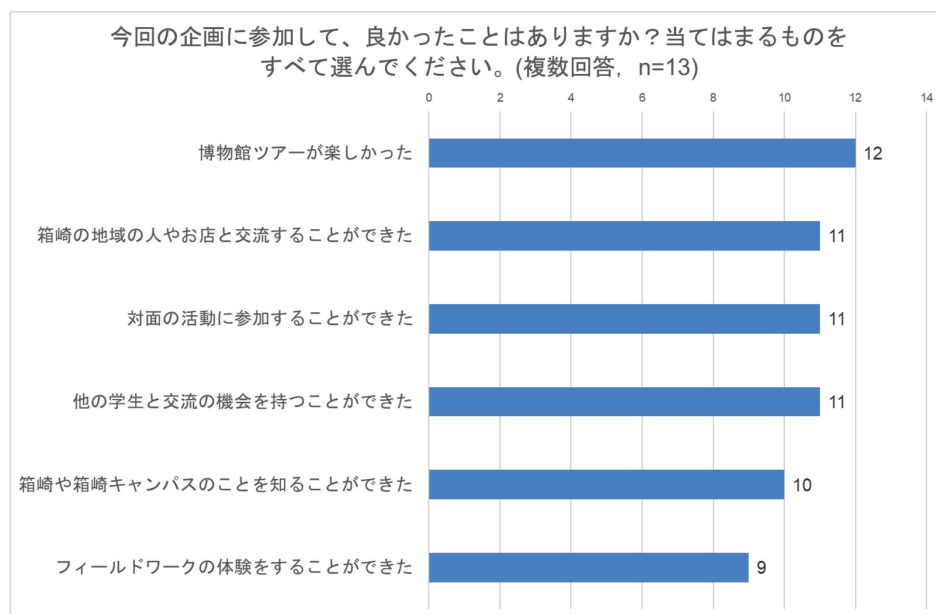


図2 参加して良かったこと（事後調査）

このように、「博物館ツアーが楽しかった」という回答が13票中12票、「箱崎の地域の人やお店

と交流することができた」という回答が 11 票など、フィールドワークの内容自体に対しても高い満足度が得られていることがわかる。具体的にどのような体験が学生にとって印象的だったのだろうか。自由回答の内容をもとに、本項ではまず九大博物館で印象に残ったことについて、次項では箱崎の地域をフィールドワークしたことで印象に残ったことについて確認したい。

まず、今回の参加者は九大博物館や箱崎地域に対してどのようなイメージを持っていたのか。事前調査の「この企画以前に九州大学の大学博物館を知っていましたか？」という設問に対しては、15 票中 10 票が「知らなかった」、4 票が「知っていたが、行ったことはない」という回答であり、「知っていた、行ったことがある」という回答は 1 票のみであった。このように、九大博物館に事前に行ったことがあったのは 1 人のみであり、多くの参加者は九大博物館のことを知らない状態であった。

それでは、事後調査の「大学博物館で印象に残ったところ、面白かったことがあればお書きください」という自由回答の設問に対する回答をいくつかの点に分けながらみていきたい。

まずは、展示物に関する意見・感想である。

- ・骨格標本の展示室が印象的でした。私自身標本を見た経験が少ないからかもしれませんが、どれも迫力がありました。鶏や馬、牛等なじみ深い動物も、骨の姿で見るととても新鮮でした。特に牛の角を見たときは、ほんとに骨でできてるんだなあと当たり前のことながら感心したり、ダチョウの嘴の大きさと鋭さに驚いたり、子どもに戻ったかのように楽しめました。標本は全てきれいに組み立てられていたので、今にも動き出しそうな雰囲気を感じました。また木製の展示ケースにも味があり、標本が所狭しと並んでいる所を見ると、収集者の標本への愛やこだわりが伝わってくるような気がしました。

- ・様々な骨が展示されているところが、1 番印象的でした。馬の骨が想像以上に大きくて驚いたのと、お話を聞くなかで、その馬が当時足に病気を持っていたと知り、見てみると、実際に馬の足の骨に傷が残っていて、そういうの含めて印象深かったです。

このように、特に骨格標本をはじめとする所蔵品を実際に生で見たことなどについて、印象的だったという感想があった。さらに、自分で見るだけでなく、教員の説明や解説をあわせて聞くことによって新たな発見をすることができたということも述べられている。

つづいて、旧工学部本館の建物や九大博物館の雰囲気については次のような意見・感想があった。

- ・会議室や大講義室は特に印象深かった。

- ・大学博物館の姿そのものが印象的でした。研究機関としての側面と、今のような博物館の在り方は似て非なるものだと思いますが、このような建物が他にも残っていた時間を経験できなかったことが惜しいです。それほど価値のある遺産だと思います。

また、旧工学部本館の壁画のある会議室（図3）で博物館の所蔵品である SP レコードを鑑賞した経験を挙げる回答も複数あり、

- ・会議室でレコードを聞いたのがとても貴重な体験だったと感じてます。
- ・やっぱり雰囲気のある洋室で、レコードを使って月の光を聴いたのが時代を感じることができ最も興味深かったです。

といった回答が得られた。このように、博物館の展示以外にも旧工学部本館の建物の外観・内装や、壁画のある会議室の雰囲気、そこでの蓄音機による SP レコードの鑑賞というような普段あまりできない体験が印象に残ったとする学生もいたようだ。



図3 旧工学部本館の壁画のある会議室で説明を聞く学生たち

さらに、什器保存に関する感想も寄せられた。これは、九大が移転する際に廃棄の対象となる什器（家具など日常生活のなかで使う道具のこと）、特に木製家具を回収、保存しようという活動であり、回収した什器は「在野保存」¹⁰として使いながら保存し活用していくという取り組みがなされている。このフィールドワーク体験のなかでも、保存された什器を活用してカフェのように配置し収蔵展示している部屋（図4）などを案内しており、次のように印象に残った点として挙げた学生もいた。

- ・大学移転に際して捨てられそうになった貴重なものたちをレスキューされたという話。移転をきっかけに多くの歴史的なものが捨てられてしまう予定だったのは驚きだった。レスキューされて、今このように見ることができたとすると、より貴重な経験をしたという思いになった。
- ・捨てられる予定だったものを集めてカフェにしているところなど、なくなってしまうものが工夫次第で再利用されて価値を与えられるということに感動を覚えた。

このように、九大博物館の見学のなかでは、博物館の展示物自体にくわえて、教員の説明や解説を聞きながら見て回ったことによって新たな発見があったことや、歴史ある建物や空間、資料を活用した実践的な取り組みなどが印象に残った点として挙げられていた。



図 4 保存された什器が用いられた部屋

4.3 箱崎地域のまち歩きの体験から

つづいて、箱崎地域のまち歩きについて、学生が印象に残った点についてみていきたい。

まず、事前調査における「箱崎や箱崎キャンパスについて、知っていることやイメージがあれば、自由にお書きください」という自由回答の設問では、

- ・オープンキャンパスで行ったことがあります、正直ほとんど知らないです。ただ地域の人々と大学が共存しているイメージがありました。
- ・オープンキャンパスにて、箱崎にいた九大生が箱崎キャンパスに対して非常に強い愛着を持っており、特にその愛おしい古めかしさが失われることを悔やんでいたことが印象的で、古き良きキャンパスだったのだと感じた。
- ・昔ながらの学生街、レンガ造り
- ・箱崎宮、放生会など。キャンパスには行ったことがありません。

というような回答があり、オープンキャンパスなどの機会を訪れる機会があった学生は何人かいたものの、箱崎地域についてもあまり詳しく知っている学生はいなかった。また、「伊都キャンパスよ

りもとても都会にあったというイメージ」といったように、伊都キャンパスとの比較の視点の回答もあった。

それでは、箱崎の町をフィールドワークしたことから印象に残った点について、「箱崎の街を歩いて一番印象に残ったところ、面白かったことがあればお書きください」という自由回答の設問に対する回答をみてみたい。まずは、九大があったときのエピソードや大学との関わりの痕跡が残っていたことに対する感想があった。

- ・途中で立ち寄った商店の方が温かく迎え入れてくださり、箱崎時代の九大についてのエピソードを語ってくださったこと。地域と大学のつながりを実感した。キャンパス移転後についても、まだ九大生とのつながりが残っていると聞いて嬉しい気持ちになった。
- ・商店街に「キャンパス」や「九州大学」のような文字が残っていたことが印象的でした。まさに大学と地域が一体となっていた時代を象徴するものだと思います。

このように、まち歩きの途中で訪れた商店でのインタビューの中で、九大があったころのエピソードが語られていたことや、商店街のなかに大学に関係する痕跡が残っていたことが印象に残った点として挙げられていた。

また、途中でインタビューに応じていただいた商店街のお店の方々に対する印象や、商店街のつながりに対して、次のような感想があった。

- ・商店街で閉まっている店もあったけどお店を続けている方々の温かみを感じた。
- ・魚屋さんや履物屋さん等の皆さんが、私たちを快く招き入れてくれたことがとても印象的です。
- ・お店の方がインタビューに応じてくださったこと。日頃の交流の多さや深さが見てとれて、あたたかい気持ちになった。

このように、商店街で訪れたお店の人が自分たちを温かく迎え入れてくれ、インタビューに応じてくれたということを印象に残った点として挙げた学生も多かった。

さらに、箱崎の街並みの変化を感じ、次のように印象に残った点として挙げる回答もあった。

- ・昔ながらの街並みが広がる一方で、空き地になっていたり新しい家が建っていたりと、様々な表情が混在している街だという印象が強く残った。
- ・一人で歩くと迷いそうな路地を歩いたのが面白かった。路地や古そうなアパートが多く親しみやすい印象を持った。伊都キャンパス周辺と比べて店が多くて良いなと感じたが、商店街に入るとシャッターが降りた店ばかりだったのが印象に残った。

このように、昔ながらの商店街の店舗がある一方で、シャッターが閉まっている店舗の存在や、空き地になっていたり、新たな家やマンションに変わっていたりというように、大学町であった頃の箱崎からの変化に着目してまち歩きの感想を書いた学生もいた。

以上見てきたように、九大博物館や箱崎の地域のまち歩きの体験は、学生それぞれに多様な印象を与えていた。これらの体験や発見が得られたということ自体が「箱崎・博物館フィールドワーク体験」という実践の一つの成果である。さらに次項では一歩先に議論を進めて、この箱崎での体験を学生自身の身近な事例に応用して考えさせるという部分について検討してみたい。

4.4 自らの通う新たなキャンパスへと応用して考える

このような箱崎でのフィールドワーク体験は、学生にどのような変化や影響を与えたのであろうか。今回のフィールドワーク体験では、箱崎でのフィールドワークを行いながら、学生たちが現在通っている伊都キャンパスとその周辺地域の関係や、より一般的な「大学と地域」というテーマにも応用して考えてもらおうという狙いをもっていた。この狙いについて、どの程度達成されたのか、関連する設問への回答結果をもとにみていきたい。

まずは、今回の参加学生がフィールドワーク体験実施前に伊都キャンパス周辺地域とどのような関係性をもっていたのかについて確認しておきたい。

まず、事前調査にて学生の居住形態を確認したところ、「ひとり暮らし」が15票中13票、「実家暮らし」が2票であった。また、居住場所については、「伊都キャンパス最寄り駅周辺」が14票中6票、伊都キャンパス周辺が3票、それ以外の福岡市・糸島市内が5票であった。つづいて、伊都キャンパス周辺の地域との関わりについて尋ねたところ、図5のグラフのような結果となった。

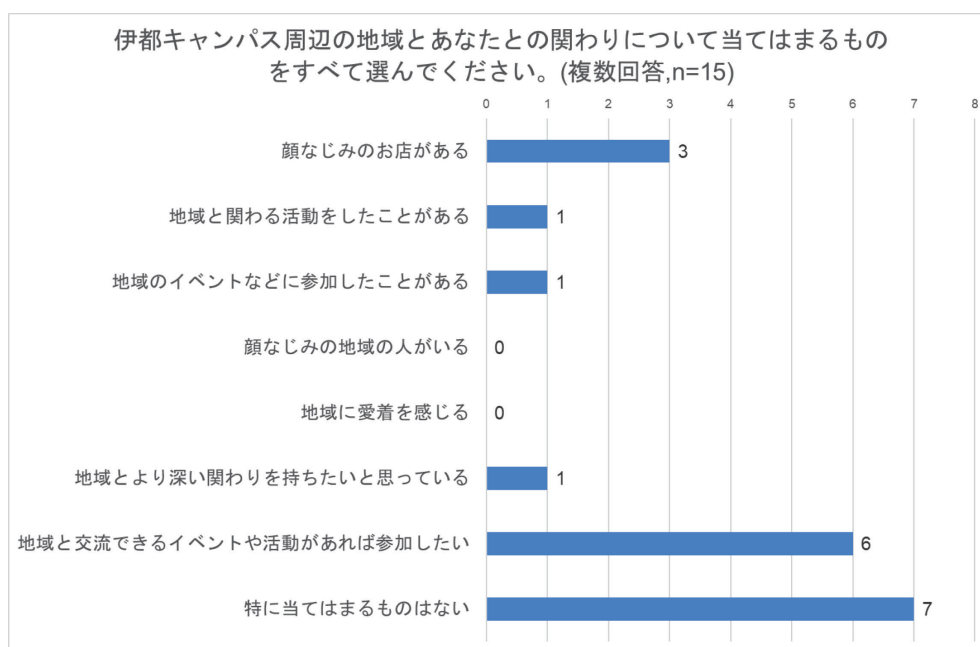


図5 伊都キャンパス周辺地域との関わり（事前調査）

「顔なじみのお店がある」という回答は 15 票中 3 票、「地域と関わる活動をしたことがある」「地域のイベントなどに参加したことがある」はそれぞれ 1 票であり、「顔なじみの地域の人がいる」

「地域に愛着を感じる」という回答は 0 票であった。また意識としては、「地域と交流できるイベントや活動があれば参加したい」という回答が 6 票あったが、「地域とより深い関わりを持ちたいと思っている」という回答は 1 票のみであった。このように、参加学生の伊都キャンパス周辺地域との関わりはあまり強くなく、今後の希望としても地域との強い関わりを持ちたいという学生はほとんどいないという状況であった。

それでは、フィールドワーク体験を経験した学生に対する事後調査の結果から、学生の意識にどのような変化や影響があったかについてみていきたい。まずは、「今回の企画に参加して、大学と地域の関わりなどについてあなたが感じたことはありますか？当てはまるものすべてを選んでください。(複数回答, n=13)」という設問に対する回答の結果をみてみたい(図 6)。

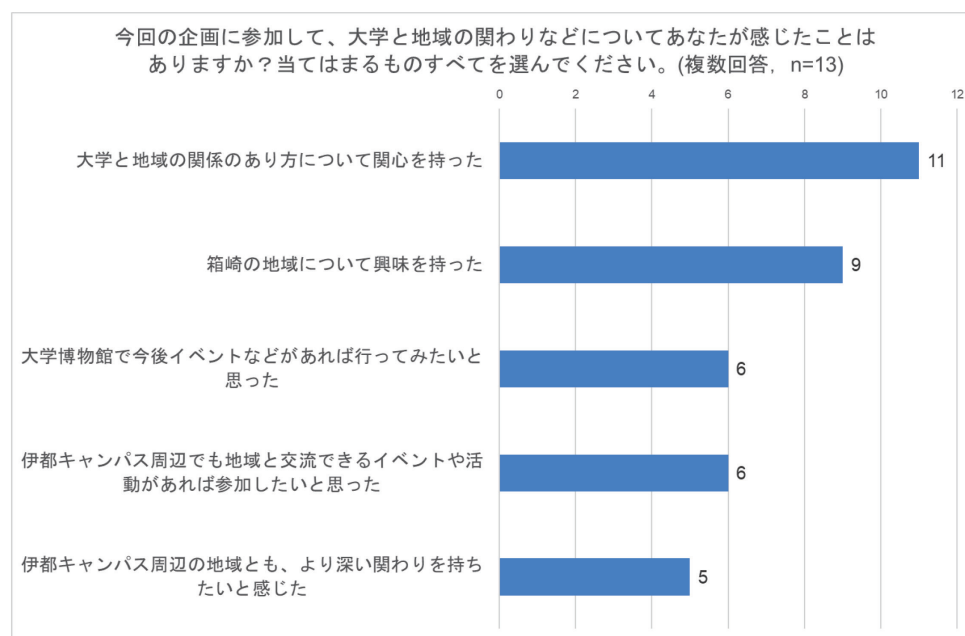


図 6 大学と地域の関わりなどについて感じたこと(事後調査)

結果を見ると、「大学と地域のあり方について関心を持った」という回答が 13 票中 11 票あり、「大学と地域」という普遍的なテーマについては、フィールドワーク体験を通して多くの学生が関心を持つことができたようである。箱崎の地域や九大博物館については、「箱崎の地域について興味を持った」が 9 票、「大学博物館で今後イベントなどがあれば行ってみたいと思った」が 6 票であり、箱崎を実際に歩き、地域の人話を聞いたことにより、多くの学生が箱崎地域に対する関心を抱いたことがわかる。

また、伊都キャンパス周辺の地域との関わりについては、「伊都キャンパス周辺でも地域と交流できるイベントや活動があれば参加したいと思った」が 6 票、「伊都キャンパス周辺の地域とも、より深い関わりを持ちたいと感じた」が 5 票であった。事前調査で「地域とより深い関わりを持ちたいと思っている」という回答は 1 票のみであったことを踏まえると、事後調査において「伊都キ

キャンパス周辺の地域とも、より深い関わりを持ちたいと感じた」が5票あったことは、箱崎でのフィールドワーク体験を受けて、伊都キャンパスでの自身の地域との関係性を考えるという学習の狙いの成果の一つとして捉えることができる。

さらに自由回答の中では、箱崎キャンパス旧工学部本館展望室から周囲の街並みを見下ろすという経験を印象に残ったこととして挙げたうえで、「自分は今、キャンパス移転後の九大が地域とのつながりを築いていく最初の段階に立ち会っているのかもしれないと実感した。」という回答があった。このように、かつての大学キャンパスと大学町の経験を学ぶことで、自分たちの通う新たな大学キャンパスと周辺地域に思いを巡らせた学生がいたということは、今回のフィールドワーク体験という教育実践の一つの成果として捉えることができる。

5. 実践から得られた知見

ここまで、「箱崎・博物館フィールドワーク体験」への参加学生に対する事前・事後の調査票調査の結果をみてきた。それらを踏まえて、この実践から得られた知見について、①コロナ禍における「リアルな体験」の持つ意義、②かつての大学町でのフィールドワークのもつ教育効果、③学生主体のフィールドワーク実践による教育効果と今後の展望、という3点に分けて示すことで、この実践の成果と今後の可能性について考察したい。

5.1 コロナ禍における「リアルな体験」の持つ意義

まず指摘しておくべきは、学生の学びにおける「リアルな体験」の意義である。新型コロナウイルス感染拡大のなかでオンライン授業が主体となるなど、これまでとは異なる特殊な環境の中で大学生を送っていた2021年度の学部2・3年生は、学外の人に話を聞くような実習形式の授業はおろか、同じ研究室に所属する学生同士の交流さえままならないような状況であった。そのような状況下で、社会学を専攻する学生に現場のフィールドワークを体験してもらうということを一つの目的として、授業とは別に筆者らが独自の教育実践として企画したのがこの「箱崎・博物館フィールドワーク体験」であった。

新型コロナウイルス感染拡大に伴うオンライン授業の導入については、先に触れたように既に様々な報告が存在するが、オンラインでは代替できないようなフィールドワークなどの「リアルな体験」が失われていることには目が向けられにくい。いくら学生に対してオンライン授業の満足度を尋ねたとしても、フィールドワークを経験したことがない学生たちは、その不在を不満に思うことはできないからである。しかしながら、確かに「リアルな体験」に対する欠乏の感覚は学生に存在していた。今回のフィールドワーク体験の参加動機として、フィールドワークを体験したかった、対面の活動に参加したかった、他の学生との交流の機会をつくりたかった、というような回答が多く得られたことは、その一つの証左といえるだろう。さらに、実際に事後調査の学生の回答の中からは、自身の体験や発見をその場で他の学生と共有したり話し合ったりしたことが、体験の持つ意味をさらに深めたということが実感されていた。

コロナ禍のなかでの「箱崎・博物館フィールドワーク体験」の実践によって、このような「リアルな体験」からの学びの重要性や、他の学生との感想の共有や議論が学びを深めることなどが、改

めて学生にとっても実感されたといえる。

5.2 かつての大学町でのフィールドワークのもつ教育効果

つづいて、「かつての大学町」であった箱崎地域でのフィールドワークを伊都キャンパスに通う学生が行うことの意義についても述べておきたい。今回参加した学部2・3年の学生は、(高校生のときにオープンキャンパスで箱崎キャンパスを訪れたという学生はいたものの)全員が伊都キャンパスに通う学生であった。学生たちにとって箱崎キャンパスや箱崎の地域は、既に移転してしまった「かつての大学キャンパス」と「かつての大学町」として捉えられるだろう。そのような学生たちに対して、箱崎キャンパスに残る博物館や建造物を案内し、箱崎地域の人にかつての大学と地域の関係性についての話を聞くことは、単に昔の大学の思い出を懐かしんでもらうことを目的とするものではない。4.4 で述べたように、学生にはかつての大学町でのフィールドワークを通して、自らが通う大学キャンパスと地域の在り方へと応用して考えてもらうことが一つの狙いであった。今回の参加学生への調査をみると、事前調査の段階では伊都キャンパスの周辺地域と深いかかわりを持つ学生や持ちたいと思っている学生は少なかったが、事後調査では多くの学生が「大学と地域の関係のあり方について関心を持った」と回答しており、また数が多くはなかったが「伊都キャンパス周辺の地域とも、より深い関わりを持ちたいと感じた」という回答もいくつかあった。また自由回答のなかでも、箱崎でのフィールドワークを通して伊都キャンパスの将来像に思いを巡らせた学生がいた。このように、かつての大学町である箱崎地域の姿は、伊都キャンパスに通う学生にとっては、これから未来の伊都キャンパスとその周辺地域の関係性を構想していくうえで一つの準拠点となりうるものだと考えられる。

過去の経験に学び、それに基づいて未来を構想することは、アクティブ・ラーナーの育成という観点でも重要な点である。先に触れたように、アクティブ・ラーナーとは「学び続けることを幹に持ち、未知なる問題や状況にも果敢に挑戦するスピリットと行動力を備えた人材」¹だとされ、さらにアクティブ・ラーナーは「予測できない未経験の状況を前にしても、既成の枠組みや考え方を超えて適切に問題を分析」するのだとされている¹¹。九大の歴史やこれまで築いてきた地域との関係性についてフィールドのなかで学び、学んだことを応用して新たなキャンパスの未来の姿を構想していくことは、アクティブ・ラーナーの育成へとつながる一つの教育実践となり得るものである。

5.3 学生主体のフィールドワーク体験という教育実践の効果と今後の展望

今回の実践の一つの特徴は、箱崎地域を研究している大学院博士課程学生である高崙が九大博物館教員の三島と協力し、企画や予行演習を含めた事前準備、調査対象者の調整など、すべて授業とは関係なく学生主体で取り組んだインフォーマルな教育実践であるということである。そのような学生主体のフィールドワーク体験という教育実践は、参加学生に対してどのような効果を持っていたのだろうか。

まずは、学生の主体的な参加を引き出しやすいということが挙げられる。今回の参加は授業時間

外の任意の参加であり、授業の単位や教員からの評価とも結びついていない。学生は教員の指示ではなく自身の興味関心によって参加することになるため、授業よりも主体的な参加が期待できる。今回の実践においては、事前調査で確認された参加理由にあるように、コロナ禍の大学生活によってフィールドワークや「リアルな体験」への渴望があったことも主体的な参加が引き出された要因の一つだったと考えられるが、学生の主体的な参加が実現できたことは一つの成果といえる。

また、学生の希望や事情にあわせて柔軟に企画を調整できることも、授業の制約がなく自由度が高い学生主体の実践の強みだといえる。今回の実施にあたっては、事前により少数の大学院生有志を対象とした予行演習を実施し、そこで得られた意見をもとに内容の検討や調整を行った。また参加学生に対する事後調査のなかで、「箱崎・博物館フィールドワーク体験の第2回を開催するとしたら、どんなことをしたいですか？」という設問を設けたが、多くの学生がさらに時間をとって深いインタビューをしてみたいという意見を書いていた。それをもとに、2022年3月には第2弾として箱崎の地域の方へのインタビューを中心とした企画を実施している。このように参加する学生にとっても、単に与えられたスケジュールを消化するだけでなく、自らがフィールドワークの立案に関わることによって、より能動的な学びの実現につながる。さらに大学院生やコアメンバーとなる学生に企画立案の段階から参加してもらうことで、より多様な能力の養成につながるという点も指摘できる。

最後に、今回のフィールドワーク体験の経験を踏まえて、今後の箱崎サテライトや九大博物館における実習や教育活用の可能性について検討してみたい。先に述べたように、箱崎サテライトや九大博物館は今後の箱崎地域との地域連携に向けて様々な取り組みを行っていかうという協働の試みを行っている。そこには、学生主体の企画や取り組みを取り入れる余地が多分にある。今回、学生を温かく迎え入れてくれた町の方々を通して、これまで長年にわたり構築されてきた九大と箱崎の町との関係性は、今もまだ残っていることがうかがえた。それは双方にとって貴重な資産である。これまでの九大箱崎キャンパスや箱崎地域が作ってきた歴史や関係性をどのように継承し、どのように新たな関係を取り結んでいくのかという実践的な課題への取り組みは、学生に大きな学びをもたらすはずだ。今後も実践的な教育と学びの場として箱崎サテライトが有効に活用され、大学と地域のより良い連携がつけられていくことが期待される。

参考文献

- ¹ 谷口説男, 2015, 「基幹教育カリキュラム——アクティブ・ラーナー育成を目指して」『工学研究』63(6): 49-54.
- ² 福岡市・九州大学, 2018, 『九州大学箱崎キャンパス跡地グランドデザイン』(2022年10月31日取得, <https://www.kyushu-u.ac.jp/f/33868/九州大学箱崎キャンパス跡地グランドデザイン.pdf>).
- ³ 伊藤幸司・日比野利信, 2018, 「序言——アジアのなかの博多湾と箱崎」九州史学研究会『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠出版, 6-9.
- ⁴ 伊東かおり／ハナ・シェパード, 2018, 「学生生活と箱崎」九州史学研究会『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠出版, 198-208.
- ⁵ 福岡経済同友会, 2017, 『九州大学箱崎キャンパス跡地の利活用に関する意見書——政府機関・本社機能が

集積する新たな都心の形成を』(2022年10月31日取得, https://www.kerc.or.jp/about/kankei_dantai/fukuoka_keizai/fuku_kyudaicampus2017.pdf).

⁶ 高嵯浩平, 2022, 「地域空間の変動から生まれるまちづくり活動と『地域らしさ』——九州大学箱崎キャンパス跡地と大学博物館をめぐる活動から」『社会分析』49: 81-96.

⁷ 九州大学総合研究博物館, 「MUSICUM KYUDAI HAKOZAKI BASE」(2022年10月31日取得, <https://hakozakibase.jp/>)

⁸ 葛城浩一, 2021, 「コロナ禍における学生の学習活動及び教員の教育活動の実態」, 『香川大学教育研究』第18号 77-90.

⁹ 九州大学教育改革推進本部, 2021, 「新しい生活様式のもとでの大学授業の実態と意識に関する全学調査1. 学生調査 報告書」(2022年10月31日取得, <https://ueii.kyushu-u.ac.jp/img/publish003.pdf>) .

¹⁰ 三島美佐子, 2018, 「九州大学の歴史的木製什器の保存と活用の新たなあり方にむけて」『九州大学総合研究博物館研究報告』15-16: 65-68.

¹¹ 九州大学基幹教育院, 「基幹教育・アクティブラーナーについて」(2022年10月31日取得, <https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/faculty/>)